



第4回 電気のふるさと フォトコンテスト

審査 結果

総評

「電源地域」という限られたエリアの中でこれほど美しい風景が撮影できるということは、日本の自然環境がいかに恵まれているかの証左でもあるだろう。

このコンテストの意義をよく理解して応募された方々の努力も感じられた。

質の高い写真作品が数多く最終審査まで残ったことも、4回目を迎えて応募の裾野が広がってきたことを裏付けていると思う。

人を含む生き物や自然環境が共に健やかに在るという有難さを感じつつ、豊かな自然と文化にあふれたこの国に住むことの幸せを、写真でもう一度見つめなおしてみよう。

そこに「電気のふるさと」という、いままで気付かなかった大切なものが、自然や風景や暮らしなどを通して見えてくるに違いないから。



最優秀賞 「急流を渡る」 水島 脩行さん

撮影地：長野県小谷村

急流の鉄橋を渡る電車の音が聞こえてきそう。新緑の山、青空と雲、水流それぞれの色彩コントラストも素晴らしい。スケール感にも動感にもあふれた、稀に見る風景写真だ。

自然と人間のエネルギーの交差を捉えた写真と言ってもいい。縦位置で余分な要素を省き、的確に狙いを描出した画面構成が際立っている。



優秀賞 「晩秋の観音沼」 住 由子さん

撮影地域：福島県下郷町

実に見事な風景写真。地上の実景と水面への映り込みの両方で、秋の雑木林の美しさを表現し、深いピントで描写された木立の繊細さにも飽きさせない魅力がある。

ただ惜しむらくは画面上下のバランスが拮抗して、やや単調に感じられること。幻想的な水面部分をもう少し多くとり入れたらさらに良くなった。



優秀賞 「悠久の大地」 中村 昭夫さん

撮影地域：三重県熊野市

穏やかに暮れなずむ棚田の景色に、日本の原風景を見る思い。

太陽が山の端に隠れたところを狙ったのと薄曇りの気象が幸いして、コントラストが高くなりすぎずにしっとりとした山里の空気感が再現できた。

安定した構図のうまさ、暗部がつぶれない露出設定など、作者の撮影技術も成功を支えたといえる。

選評

審査委員長
板見 浩史さん

1952年、福岡県生まれ。法政大学卒。写真専門誌『フォトコンテスト(現フォトコン)』誌の編集長を約20年務めた後、2004年独立。写真関連の企画・制作会社Jophy Communications代表。フォトエディターとして多くの写真賞やコンテストの審査を担当。写真関係者でつくる俳句会「一滴会」同人。2007年11～12月、NHK教育TV「趣味悠々」で『カシャッと一瞬! フォト五七五』の講師を担当、2009～2012年NHK衛星第2の同名番組で審査員を務める。日本写真協会会員。NPOフォトカルチャー倶楽部専務。

